

「しぐさの芸術」はけっしてあやふやなものではない！マイムは正確でわかりやすくなければいけません。この言葉は疑いをおこさせ、うらおもてのあるようにきこえるかもしれません。物まね師はだますことも嘘をつくこともできないものです。どのしぐさにも動機があるからですよ。マイムは体をつかって感情をあらわすべきものであって、しぐさで言葉のぶんをあらわすものではありません。ギリシャの作家ルキアン(Lukian)の言葉に、「しぐさをまちがえた役者は、言語障害をおこしたようなものだ」というのがあつてあります。つまり昔の物まね師たちは、対話体になつたパントマイムには危険性があるということを知つていたのです。マルセイユの役者たち、**Louis Rouffe, Farinia, Severin**らは1つのテクニックを残してあります。それは心理的なパントマイムを防ぐものであり、俳優がずっとやつてきた話術をとりいれたりするパントマイムにはならない、ということです、**Severin**は"**L'homme blanc**(白い人間)"という題のみごとな本を書きました。かれはそのなかで、このノーブルな黙劇派のことを、愛情をこめて語つてあります。

P.44 「パントマイム芸術」 1971年第1刷発行 てすびす双書63 未来社

(原書1956年 Herbert Jhering · Marcel Marceau "Die Weltkunst der Pantomime" Aufbau-Verlag Berlin)

